

# 『最後』に甘えないように

「今日は、何が『最後』なの？」

「国語（の授業）ですね。」

「給食も、だよね？」

「あつ、そうですね！」

登校してきた三年生に、私は声をかけました。授業にしても、給食にしても、三年生に「最後」が確実に迫ってきており、それに対して感慨深く思っていることが、朝の何気ないやり取りからわかりました。「最後」がわかっていると、人の心はそれに向けて準備ができません。「最後」には、人の心を大きく動かす力があるようです。

明日は卒業式。三年生にとっては、北中での「最後」の生活となります。仲間との別れ、教師との別れ、教室との別れ、そして、学校との別れが全てを美しくし、涙や感謝の言葉が生まれることでしよう。今から十一年前の二〇一一年三月十一日十四時四十六分、突如「最後」が訪れ、悲しみと絶望が一拳に押し寄せたできごとがありました。知っていますか。そうです、東日本大震災です。死者と行方不明者を合わせると、二万二千人に上ります。十一年経った今でも家族の行方を捜している人や、避難生活を続けている人は少なくありません。

二〇一一年は平成二十三年ですから、皆さんは記憶があるのかな。かの幼少期を迎えていたはずです。私ははつきりと覚えています。あれは、旧瑞陵中学校の卒業式が終わって数日後でした。授業なかつた私が職員室で一息ついていたら、校舎が急に揺れました。この辺りはのんびり構えていられる程度の揺れでしたが、地震による津波が東北地方を襲い、とてつもなく大きな被害が出ました。

テレビを点けると、避難する人の後ろから、海水がどんどん迫ってくる映像が目飛び込んできました。やがて、海水が船を押し流し、高い建物を飲み込み、街中に襲いかかる映像に変わりました。時間が経てば経つほど、背筋が凍りつく状況が画面に映し出されました。

突然の「最後」には情けも容赦ありません。人々は、肉親や知人、住み慣れた家や思い出の詰まった故郷など初めとして、全てを一瞬で失い、悲しみのどん底に突き落とされました。感動や感謝を味わうことを一切許さない冷酷な現実です。

「最後」という言葉に甘えると、そこに至るまでの過程がおろそかになります。したがって、「『最後』だから」という意識ではなく、悔いのないように有意義に毎日を過ごそうと考えるべきです。学校においても、それが当てはまる時がありました。

一昨年の卒業式と修了式です。三月の二日から全国一斉休校が始まり、「式はできるのか」という不安が募っていました。感染症の影響次第では、「最後」が危ぶまれる状況も生まれます。だからこそ、日々を大切にすべきですね。

（三月八日 記）